医療施設　栗山洋一さん（五十代）

栗山さん

損害は億単位に

病院が一メートル前後ぐらいまで浸水しました。一階はもう全滅状態ですね。自動車だけでも六台水没しました。修繕と医療機械の損害が億単位で、資金繰りにも苦労したのが実際です。

自宅は一メートル。一階は床上三十センチ。一メートル盛り土してあったんですが、それでも床上三十センチぐらいまで水が入って、一階にある家具とか絨毯とか、自動車が水没しちゃいましたね。盛り土をしてないところなんか一メートル三十から一メートル六十ぐらいまでこの辺一帯。身長ぐらいまで床上浸水してました。まさかこんなに浸水するなんて思ってなかったですね。床下浸水ぐらいで終わるのかななんて、みんな結構楽観的に考えてたんですけど、考えが甘かったんですかね。

病院が心配だったので近くに避難したんですが、実際水が入って病棟まで行くような状況でもなくなってしまって、その辺が本当に苦労しましたね。周りの住宅だと、文化福祉会館まいんに避難された方が多かったですね。あと、こういう地域は結構親戚とか多くいますので、親戚の家に避難してる方も多かったんじゃないかなと思います。

一からの診察

四日ぐらいたって何とか診療ができるようになったんですが、医療機械もなければ、医療資材も何もないですから、質の高い医療っていうのは全くできない状態です。完全に復旧っていうことになると、半年経ってるんですね。半年間はエレベーターなしで病棟２階にみんなで患者さん運んだり、給食を運んだり、人海戦術で対応しておりました。

患者さんのカルテがまだ紙カルテだったので、半分以上水没してしまったんですね。カルテがないので、一から診察をして、処方箋、薬を出すという診察になっちゃいましたので、ものすごくドクターも時間がかかって、薬も何を出していたのかもわからなかった。当時はそれが一番医療従事者にとっては悩みの種でしたかね。

多くの人に支えてもらった

よかったのは東日本大震災のときに被災した経験を生かして、院長が病棟を建てるときに発電機を屋上に持っていっていたので、電源を確保できたということですね。それと、給食会社と契約していたので、食材を調達できていたり、キッチンカーを寄越してくれたりとかで、病棟機能を何とか維持することができました。一番大きいのは電源を確保できたことと、給食を外部委託したことですね。

入院患者さんを一人も他に転院させずに診察できたところも良かったと思います。水戸と古河の日赤の病院から赤十字の災害支援チームの方たちが来てくれたおかげで院長も災害復旧にちゃんと指揮をとることができたということが非常に助かりました。

あと職員がいざというときにどのルートで来ると安全に来れるかとか、ガソリンも医師会から特別に救急用のステッカーをいただいて、優先的に給油できる制度ができていて、車は使えました。ただ全部浸水してしまったので、うちの車は１台も残ってなかったんですね。それで日産のディーラーさんから、将来車購入するよという約束のもとでレンタカーをすぐに、無料で、車が納車されるまで貸してもらいました。車がないと本当に困

っちゃいますんで助かりましたね。

あと行政による支援がこんなに手厚いんだなっていうのはびっくりしましたね。経済的な支援というんですかね、助成金とか補助金とか修理代とか、いろんな案内をしてくれて、こんなにいろいろお金を出してくれるんだなっていうのが一つありました。それから、自分たちの職場だって甚大な被害を受けたのに自宅に来てくれて、体の容態どうですかと、何か悩みありませんかっていうようなことを、役場の職員の方が聞きに来てくれたりとか、そういうことが心の支えになりましたかね。

本当に経済的に精神的にですね、行政の支援を受けられて、本当に心の支えになったというか。ボランティア活動、社会福祉協議会含め、ＮＰＯ、こんなにボランティアの人たちもこんなに来てくれたんだっていうね。そこがものすごく印象的でしたね。

家財道具はほとんど全滅ですし、庭なんかも、流木とかタイヤとかとても一人じゃ持ち上げられないようなものが瓦礫の山になってたんですね。それを力のあるボランティアの方が片付けて、ゴミの片付けとか泥のかき出しとかしてくれて、本当に助かりました。孤立無援じゃないなっていうようなことを感じさせてくれるボランティアの人たちでしたね。精神的な支えも非常にありましたね。特に大子町なんか高齢者が多いですからね。非常に助かったんじゃないでしょうかね。一人暮らしの世帯が何百人も、何百世帯もありますからね。

水害後の動き

この地域の四つの医療機関が全部浸水したとき、高台にどこか病院を共同で設立したらどうかという話も出たんですけど、それが完成するまでに、かかりつけ患者さんの診療はもとより職員と家族の生活を誰が保証するのかという喫緊の問題もあり、病院を高台に作るっていう話は頓挫してしまったという。医療機関の場合、簡単に高台に移ることができない、制約があるということで、これからの課題になるんじゃないでしょうかね、同じところでどうしても事業継続せざるを得ないような条件になってしまってるっていう。

水害があった後、ＢＣＰプランを作りました。それを作って従業員に告知をしたのと、とにかく大事なものを高いところに上げると。データのサーバーとか、カルテとかそういうものもなるべく高いところへ持っていって、室外機なんかも、みんな架台の上に置いてるんですけどね。本当は高台に移転するのが一番安全なんですけど。資金的なものとスケジュール、時間的なことでそれはできませんでしたね。

人付き合いの密度が高齢者夫婦を救った

大体十世帯ぐらいが一つのブロックになって、しょっちゅう回覧板を持ってったりとか、決まった日にみんなで草刈りをしたりとかそういう（普段の）コミュニティ活動みたいなのは、水害のとき良かったんじゃないかなって思いますね。高齢者夫婦が取り残されちゃってですね、二階に避難したんですけど、二階にはもう水が達しようとした、そんな状況になっちゃって、お隣の若い夫婦が住んでる家にはしごを渡して、それで避難させてもらってましたね。田舎の良さというかね、人付き合いの密度が濃いっていうのは活かされたかなって思いますね。